



▲ドイツでは1971年から1985年くらいまで、モンキーが販売されていたという。右上には「車に積めるぜ」の写真も。写真は当時のポスターで、995DM(ドイツマルク)、最高速40km/h、1.7PSという説明がなされている。

▼新車のZ50Zなんて、トーマスさんの家では珍しくない。この部屋は新車がザックリと保管されている。



▲USモデルのタンクのエンブレムはHONDA Mini Trailと記されている。もちろんエンブレムの新品スペアも多数所有していた。「1個わけて〜!」



▲トーマスさんのお宅にはあらゆる遊び道具がある。鉄道模型、フィギュア、人が乗れるほど大きなクルマのラジコンなどなど。この「SCHUCCO」というエンブレムを持つ消防車の模型も、相当な価値を持っているという。



◀この2台はフランスで発売されていたモデルだという。世界各国の4MINI、特にモンキー系のコレクターとして、トーマスさんはペーターさんと同じ目撃存在なのだ。

▶先月号でもご紹介していたけど、BRAVOという新聞社が限定16台だけ製作したというレアなモンキー(左)ももちろん所有。



506台保有のペーター氏も一目置くフランクフルトの歯科医とは!?

# 「30年以上集めてます」フランクフルトの4MINIファンを直撃!

OWNER: Thomas in Frankfurt  
PHOTO&REPORT: Tsuyoshi Chiwa  
TRANSLATION: Keizo Kagaya (KA-HA-Trading GmbH)  
SPECIAL THANKS: C.F.POSH (Tokyo&Osaka)



THE 4MINI WORLD SURPRISING DISCOVERY vol.2 Frankfurt Germany



▲3階から屋根裏部屋に出ると、まるで映画のセットのような部屋となる。ココもトーマスさんの4MINI保管室となっている。ドイツで初対面的一般家庭に入れてもらえるなんて、夢にも思わなかった。

先月号でもご紹介したが、日本が世界に誇るレジャーバイク、モンキーなどに代表される4MINIは、懐が深く、無限に楽しめる趣味性によって、世界各国でも愛されている。今回もドイツの玄関口、フランクフルトで遭遇したとびっきりのコレクターをご紹介。506台を保有するというペーターさんも一目置くトーマスさんのお宅におじゃましてみた。ちなみに防犯上の理由により、詳細な住所や氏名を特定できるようなカットや本文は掲載できないのであしからず。



▲上写真のモデルはUS仕様の「AKO」というモンキーだという。メーターはなく、写真のようなHONDAのプレートが付くのが特徴。



先月号でご紹介したペーターさん(右)と、今回取材させていただいたトーマスさん(左)は4MINIコレクターという同じ趣味を持つ旧友。

12月号でご紹介したペーターさん。彼の家で取材を終え、ケーキとコーヒでひと休みしていると、ペーターさんが口を開いた。「私も一目置く、もの凄いコレクターがいます。紹介しましょうか?」506台もの4MINIを所有しているペーターさんも一目置く存在、想像もできないその光景を見るために、我々はペーターさんに案内されてフランクフルト市内を移動した。到着したのは歯科医だった。閑静な住宅街にボツンとある歯科医。そうトーマスさんは歯医者さんなのだ。まずは歯科医院の中へと案内される。夜の静かな住宅街、無人の歯科医院はすこし不気味だ。



▲3階建ての家は、あらゆる部屋と、いたるところの収納スペースに4MINIが秘蔵されている。この棚には激レアなモンキーの新車と、新品のフレームが保管されていた。スゲー!

奥に入ると4MINI系のフィギュアやラジコン、あらゆる面白そうなおもちゃが並んでいる。階段を3階まで上がり、さらにそこから屋根裏部屋に入る。いきなり目に飛び込んできたのは、等身大のマネキン、しかもウエディングドレスを着ている。これには正直オドロイタ。なにかの映画のセットが現実になったみたいだ。しかし、こやかにトーマスさんが指差す先には、これまた激レアな4MINIがズラリと並んでいた。この部屋にはUSモデルのモンキーと、ペーターさんも所有していたBRAVOという新聞社が限定で作成した前後5インチタイヤのモンキーが何台もある。実はドイツでは1971年から1985年くらいまで、普通にモンキーが買えたという。トーマスさんは1976年くらいからモンキーを収集し始め、今に至るという。それから30年以上、彼は4MINIを愛し続け、US仕様など、世界各国のモンキーを収集し続けているのだ。日本から遠く1万キロも離れたドイツの街に、これほど4MINIを愛し、実際に保有しているファンがいるなんて、4MINIの生まれ故郷である日本に生まれただけで、少し誇りに感じた瞬間だった。